

## 地域・学校防災教育セミナー 実施状況

日 時 平成29年11月9日(木) 13:00~16:20

場 所 千葉県教育会館

参加者 221名

### 1. 実施概要

命の大切さを考える防災教育公開事業(県教育庁事業)を実施した小中学校、高校及び特別支援学校の8校による事例報告の発表がありました。発表後は、常葉大学社会環境学部の小村隆史先生から講評がありました。

その後、小村隆史先生に、「地域と学校の連携による防災教育」について、御講演いただきました。

### プログラム

No.	演 題 等	講師及び発表者
1	防災教育モデル事業事例報告	
	(1) 学校と地域がつながる防災教育の推進	八千代市立新木戸小学校 教頭 田中 一成 氏
	(2) 防災意識を高めて主体的に行動できる 児童の育成	松戸市立六実小学校 校長 鈴木 孝明 氏
	(3) 災害状況に応じて自ら考え、判断し、 自他のいのちを守る行動ができる子ども の育成	旭市立飯岡小学校 教諭 宮里 龍実 氏
	(4) 命の大切さを考える防災教育公開事業 実践報告	東金市立西中学校 教諭 石井 健司 氏
	(5) 津波からの避難～教科・領域における 主体的に行動できる生徒の育成～	君津市立周西南中学校 教頭 栗原 朗 氏 教諭 鈴木 賢三
	(6) 災害に強い学校づくり・地域づくりに 向けた地域連携及び人材の育成	県立市川工業高等学校 主幹教諭 山本 和人 氏
	(7) 防災に関する指導方法等の開発・普及等 のための支援事業 学校防災アドバイザー活用事業の実施	県立佐原高等学校 教諭 片野 寛和 氏
(8) 命の大切さを考える防災教育公開事業 ～帰宅困難・引き渡し～	県立市原特別支援学校 教諭 大西 俊輔 氏	
2	講演者による事例報告の講評及び質疑応答	講師及び発表者
3	講演 「地域と学校が連携した防災教育 -現在形の防災教育×未来形の防災教育-」	常葉大学 社会環境学部 准教授 小村 隆史 氏

## 防災教育モデル事業事例報告

学校種に応じた地域との組織作り、防災訓練、防災教育の実践の取組について、事例報告を実施しました。

※事例報告は下記のホームページでご覧いただけます。

URL : <http://www.pref.chiba.lg.jp/kyouiku/anzen/saigai-anzen/index.html>

千葉県ホームページ: ホーム > 教育・文化・スポーツ > 教育・健全育成 > 学校教育 > 安全・保健・給食 > 学校安全 > 学校における防災教育

### 講演『地域と学校が連携した防災教育-現在形の防災教育×未来形の防災教育-』

常葉大学 社会環境学部 小村 隆史 氏

最初に、この会場にいる我々が覚悟していくことはなにか。防災教育は何をどう教えるものなのか、お話したいと思います。

千葉県では、首都直下地震のことを考えなければなりません。震度6強の地震は、どこでも起こる可能性があります。首都直下地震が来たら、長さ30キロにわたり、つぶれたハンバーガー状に被災地域が広がることになると考えられます。そして、その周辺地域は、支援に回ることができると考えてほしい。

南海トラフ地震は2038年ごろに発生すると言われている。物理的な破壊も怖いですが、社会経済的な破壊を恐れています。

今日の狙いの一つは、皆さんと次のビデオをみることです。阪神淡路大震災の映像ですが、これを見て都市型の地震のイメージを持ってほしい。私が知る限り一番説得力がある映像ですが、映像の中で防災について1か所間違っているところがありますので、皆さんに気づいていただくと嬉しく思います。

#### 【ビデオ放送】

このように、壊滅的につぶれている住宅がある一方で、住宅メーカーが、震度7に何回耐えました、と宣伝している住宅があります。そうした住宅がいくらで売っているのか、いずれデータをそろえたいと考えています。すべての住宅がこの映像のように倒壊するわけではなく、生き残る人間のほうが多いのです。しかし、災害は貧しいものに対して厳しいという現実があります。

映像に含まれる間違いの答え合わせですが、映像では、「重機を持った大規模な救援部隊が被害者を助けた」ように捉えられる言い方をしています。この地震の死者は大半が外傷性の窒息死で、それは十数分で発生します。救助隊など間に合うはずがなく、地域の互助でも間に合わない。それを理解しておいていただきたい。

防災を学ぶ意味は2つ。自分と家族が被災者にならないこと。そして無事であったら、よき支援者になることです。

防災教育はなにを教えればいいのでしょうか。方法論はあるのでしょうか。こういうことをやるのは違っているのではないか、という観点で、次のビデオを見てください。

### 【ビデオ放送】

津波の危険がある場所に立っている保育所が、一生懸命避難訓練をやっていて、これが防災教育であるという。そもそも、自分で逃げられない人たちの施設を、こんな場所に作るべきではありません。

「釜石の奇跡」を、あまり美談として評価してはいけません。そうした捉えられ方は片田先生も不本意だろうと思います。災害リスクがある場所に体の自由が利かない方々の施設があるという現実と、我々はどう取り組むか。それでも学校はまだいい、児童生徒は自力で逃げることができます。しかし医療機関や老人ホームの立地は考えなければならない。津波が来るところに重要施設を建てるべきでない。防災教育は、そういうまちづくりができる人材を育てるべきなのです。

災害時には地域がもともと抱えている矛盾が噴き出し、地域が抱えている傾向が加速化されます。典型的には過疎化です。地域社会が抱えている矛盾に取り組む必要があり、その矛盾に負の傾向があれば、災害が来る前に向かい合い、矛盾を正しておく必要がある。皆さんが行われている防災の物語に、このような観点は入っていますか。男女共同参画に携わっている方は、防災のこの部分に最も熱心に取り組んでいる方々です。

私は、避難を語るのではなく、避難しなくて済むまちづくりを、対応を語るのではなく、対応しなくて済むまちづくりを、説いていくべきと考えています。

「おかげさまで無事に避難できました」ではなく、「おかげさまで、避難しなくても済むまちづくりが間に合いました」と言われたいと思っています。「避難で命を守れるかもしれないが、避難で人生は守れないし故郷も守れない、ということを徹底すべき」。この一節こそ、東日本大震災最大の教訓なのです。

そんなことを考えると、現在形、未来形の防災教育、自分と家族を守る、地域にふるさとを守る、この二つの観点でマトリックスを作ることができます。

小学校段階の防災教育では、今、災害が起きたとして、周りに大人がいなくても、自分自身を守れる者になってほしい

中学校段階の防災教育では、今、災害が起きたとして、地域の一員として、大人を助けられるような者になってほしい。

高校段階の防災教育では、巨大災害が予定されている時代に船出する以上は、将来確実に襲い掛かってくる災害で人生を狂わされることのないような者になってほしい。最高の防災は学びです。

大学・大学院段階では、私の在籍する大学もまだまだ至らないのですが、「時代の

宿命」を受け止め、自分の人生を守るだけでなく、「予防に勝る防災なし」の観点で、被害を出さずに済むまちへと変えていく、その担い手を育てる防災教育を行ってほしい。

河合雅司さんの本「老いる町 崩れる街」をご紹介します。高校生なら読めます。自分たちの人生設計を考えられる、こういう本を読んで学ぶことが防災について学ぶことなのだと気づいていただきたい。

先日前お手伝いをした中学校の取組をご紹介します。全校生徒400弱で、60チームくらい作り、DIGで、地域の分析をやりました。消火器が期限がきれている、狭い道で人が人の搬送ができない、などなど、地域の危険個所を見つけていきます。はっとさせられたのはこの付箋。「むり どうにもならない」と書いてあります。現在形で考えたらそうかもしれないが、そこを未来形で考えさせたい。今はできないかもしれない、ならばこれからどうすればいいのか、自分たちにできることはなにか、それができる大人になるというのはどういうことなのか。そういうことを、生徒たちに考えてもらいたいです。

最後に、2017年11月8日(つまり昨日)、富士市立吉原北中学校で行われた、地域を巻き込んだ防災教育の公開授業後の検討集会で、わたしが生徒に伝えた助言「KPT (keep, problem, try)」についてお話します。

**【Keep：このまま続けるべきこと（出来ればもう少しうまく）】**

○継続1：地域との関わり。

「大人になってもこの日のことを忘れないでね。」「出来れば、大人にお世話になっていることをわかってね。」「大人になったら子どもたちの将来を守る活動を手伝える大人になってね。」と伝えたい。

○継続2：学年を越えたつながりづくり：「縦割り」の長所

「作業を回していくのは上級生の役割だよ」という意識付けを！先輩に学び、後輩を鍛える理想を目指そう。

○継続3：自分達の発言が地域を良い方向へと変えていく、その成功体験を得ることができる（かも）

少なくとも、大人の前でリアルな発表体験をすることはできるし、次年度、問題提起した成果（結果）が確認できるかもしれない。

**【Problem：改善すべき事柄】**

○課題1：防災教育における目標設定の間違い

避難をするのが防災ではない。「おかげさまで避難をしなくて済むまちづくりが間に合いました」でなければ、子どもたちは（そして40歳以下の先生方も）、予定さ

れている巨大災害で、人生を狂わされてしまうだろう。

○課題 2：防災教育における「時間の概念」の無さ

「自分・家族×ふるさと」「現在形×未来形」で出来るマトリックスについて、考えてみて欲しい。

○課題 3：防災教育における「住む場所選びの目を養う（育む）」「そういう場所を購う経済力を持つ（持たせる）」という発想の無さ

知識に基づく自己責任の「覚悟」。「選べるならばどんな場所に住みたいですか？」を問えるか。安全で安心な人生には、ある程度の知識と経済力が不可欠だ、という、現実を教えることの意味

【Try：挑戦したいこと！】

○挑戦 1：継続性の確保

3年続けられれば、サイクルが出来る。担当教員が異動しても、校長が変わっても継続する取組を目指す。

○挑戦 2：横展開

今年は岩松中学校も挑戦中。富士市は、この種の活動をやる環境としては相当恵まれている。

○挑戦 3：テキスト・副教材作り、パッケージ化、事前教育プログラム開発と実施

これらは、地元の大学である私達の仕事と考えています。

こういう実践的なお手伝いをしつつ、理念的には前半のお話しを続けていきたいと考えています。

ご批判もあるかと思いますが、ありがとうございました。

【質問】 旭市立飯岡中学校

住む場所を選ぶ目を養うというお話は、津波浸水地域に立地する学校として考えさせられました。私の生徒には、猟師や魚屋をやっており、海岸沿いに住んでいて、そこから離れられない子もいる。子供たちの住んでいる場所がハザードマップで赤い危険個所に入っていることをどう伝えるべきか、非常に悩みながら防災の授業をしています。先生ならば、こうした子供たちに、どのように声かけをして目を養っていくことを伝えるか、ご指導いただきたい。

【回答】

私の持っている事例は中学校なのですが、ご参考にお伝えします。子供たちに、ハザードマップで自宅があるところにシールを張らせて、自宅のリスクを確認させました。君たちもいずれ大人になる、大人になった時にここに居続けるか、別のと

ころに行くかは、君たちが考えることだ。私はそのように言ったし、飯岡の子供たちにもし向かうことがあればそう伝えたいと思います。

家業を継ぐことも継がないことも含めて自分の人生です。災害覚悟でリスクの高い地域に住み続ける場合は、自覚して、それに見合った備えをしてくれ、と伝えている。そうしたことを、18歳、あるいは22歳の、自分が社会に出るときまでに、考えておくことを伝えてほしいと考えています。

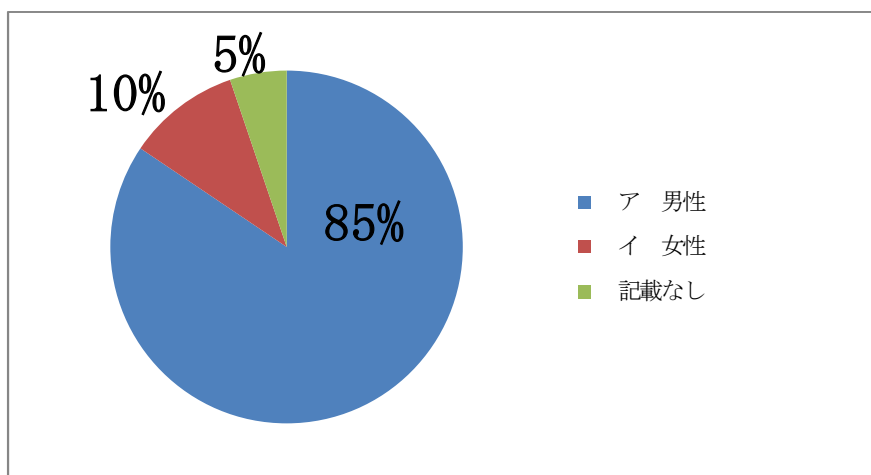
## 2. アンケート結果

今後の参考とするため、セミナーの内容等について、参加者に対しアンケートを実施しました。

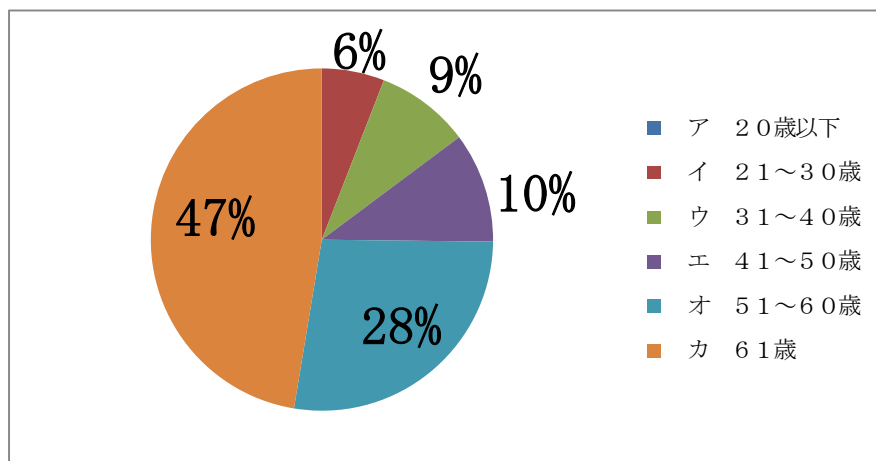
主な結果は以下のとおりです。

### (1) 参加者について

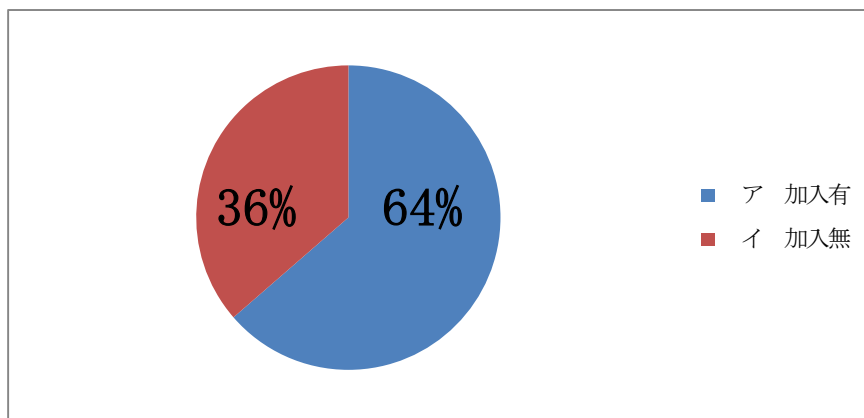
#### ア 性別



#### イ 年代



ウ 防災に関する組織への加入状況等



有の場合、加入している組織等（複数選択可）

